

溢れるほどのおじぎ草が植えられていた庭

立 夏

(訳 富永涓子)

十月の最後の日、彼は父母を訪ねて故郷へ帰ろうとしていた。

秋たけなわで、陽の光は身を照らし、しばらくぶりの感覚が突然潮のごとく湧き上がり、^{まぶた} 瞼にまでも溢れ出た。太陽が地面からとても近くにあるように感じられた。

町は小さく、連れて来た恋人とあてもなくぶらぶらと歩いた。彼女は大都市から来たので、小さな町のすべてに好奇心がふくらんだ。彼はちょっと考えて、「静かな場所に連れて行ってあげるよ」と言った。

路地はどこも静まり返り、その中でただ彼らの足音だけがこだまし、彼女は「これこそが小さい町の醍醐味ね！」興奮して言った。

しかし彼の足どりは、この一筋の路は何もかも知り尽くしているのだとばかりに、どんとどんと軽くなり、はるか遠い少年時代に戻ったようだった。路地のつきあたりには、一軒の庭付きの平屋があった。

木戸を押し開けると、家は既に古く、見る影も無く壊れ果てている。しかし庭の中はとても賑やかで、塀にはつやつやとしたみどりの蔓の葉が一杯に伸び、地面には植木鉢がたくさん置いてあって、真っ赤や淡い黄色のカンナの花が目もさめるように美しくあでやかに広がり、一方薄いピンクの庚申バラは少しはにかんで頭を垂れ、それにいくらかの名もない小花とぼうぼうとした雑草がそれらを引き立てていた。どうやらこれらの花々は、すでに長い間世話をする人もないようだが、かえってちょうどほどよい野性美をかもしだしていた。しかし彼の心は失望し、庭の中ほどを指して「あの年、いつもあそこに坐って本を読んでいたのだ

よ」と言った。

あの年、少年は高一になり、ちょうど強情で不遜な年頃だった。父はときどき彼に向かって大声で叫び、母は毎日くどくどと息子の意気地なさを悲しみ嘆いた。

少年は叔父叔母だけには好かれていると思っていた。叔父の家は学校から近くで、ある日学校が終わった時にちょうど雨が降り、雨を避け叔父の家に駆け込み、叔父と軒下に坐って石畳みに滴り落ちる雨の雫を見ながら、思い思いにおしゃべりをした。少年はこれらの感覚がとても好きになり、たびたび放課後、方向を変えて叔父の家へ行きひとときを過ごした。

庭はそれほど大きくはなく、三、四軒の家が囲んでいるだけだった。青いレンガ造りの庭塀、石畳の床、塀の周りに沿って置いてあるあるたくさんの植木鉢には、花は無く、なんとすべて一色だけのおじぎ草だった。最も少年をひきつけた叔父の家の本棚に溢れている本だった。夕方陽が傾く中、ありふれた塀で囲まれた敷地で、いつも少年が竹の椅子に腰かけて興味津々と本を読んでいるのが見かけられた。一人の少女の出現で少年の心はかき乱された。

少女の年は少年と同じぐらいで、毎日彼が本を三、四頁めくった頃、ちょうどかばんを背負って庭に入って来るのが見えた。時には如雨露^{じょうろ}を持っておじぎ草に水をかけているようだった。

実はこれらはすべて彼女が植えたものだった。少年は好奇心を持って頭を上げ彼女を見ると、彼女も又ちょうどちらりと目を向け、視線がぶつかったとたん、さっと瞼を落とし、それはまるで触られたおじぎ草の葉っぱのようだった。

彼女の目は特にきらきらとして、一筋の清らかな泉水のように透き通っていた。少年は心の最もしなやかなところが揺り動かされ、一種のびりびりとしびれるような感覚が突然全身に満ち溢れた。

これは少年の十何年かの人生の中で未だ体験したことの無い感覚で、身体の奥

からちょうど温泉の熱気が外へ向かって吹き出てくるように、心の中のひっそりとしたところにほとぼしる感情が煌めいた。

毎日二人の目は交わり、少年の心は期待で満たされた。少女が門に入る前、彼はすぐ本の頁をそっとそのまま閉じ、彼女が門に人り向きを変えて東側の家に入るまでずっと見てから、やっと頭を下げ本の続きを読んだ。

少年は少女の心が自分と同じように待ち望んでいるに違いないことがわかった。もしある日用事があって叔父の家に行けなかったとしたら、次の日に彼は彼女の眸からあふれる恋しさと再会の喜びを見出したことだろう。彼らは目を通して次々と楽しい暗黙の交流を伝えたが、少年は彼女の名前も知らず、彼女と一言も話しすらしなかった。黙っていても温かい交流が続く中で、少年のそわそわと落ち着かない心はだんだんと平静になり、この素晴らしいよしみが自分の肩に責任を負わせるように漫然と感じられ、未来への憧れで満たされた。

何ヵ月か後、少年は小さな雄鶏のように父と鋭く対立することももう無くなり、又、母がひとしきり小言を言うのにも、耐えられるようになっていた。最も驚いたのは先生と同級生で、少年の成績は後ろから十一番めだったのが一気に前から十番目になった。

夏休みに、父母は褒め励まそうと少年を連れて北京へ行った。香山の頂上で彼は紅葉で作った葉のセットを買った。帰ってから彼女に贈ったらきっと喜ばれるだろうと思った。

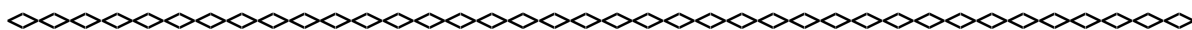
帰ってきて以来、少年は少女に会うことはもうなかった。東側の家の門はずっと堅く閉まったままだった。彼は何度も叔父に聞こうと思ったがついに口に出すのをやめた。

あの紅葉の葉を少年は使うのに忍び難く、引き出しの一番奥に入れたままにしていた。

恋人は澄んだ大きな目で、可愛らしく笑い、羨ましそうに彼に言った。「美しい庭ね。ここで読書するなんて、きっと素晴らしい感じ！」

いっぽう、彼の視線はぼんやりとしていて、彼女の話が聞こえたのか、聞こえなかったのか、ただ「そうなんだ。実に美しい。ここは、溢れるほどのおじぎ草が植えられていた庭なんだ」と言った。

(『中国微型小説排行榜(2012)』百花洲文芸出版社，南昌市，2013，pp. 80-82.)



(中国語原文) **种满含羞草的院子** 立 夏

那是10月的最后一天，他回家乡探望父母。秋意已浓，阳光照在身上，一种久违的感觉突然如潮水般涌来，甚至涌出了眼眶，他觉得，太阳似乎离地面特别近。

县城不大，他带着女友漫无目的地走，女友来自大城市，对小县城的一切都充满好奇。

他想了想悦：“我带你去个安静的地方吧。”

所有的巷子都很沉默，只有他们的脚步声在里面回荡。女友很兴奋，说：“这才是小城的味道！”

而他的脚步越来越轻快，似乎回到了遥远的少年时代，这是一条多么熟悉的路，路的尽头，是一座带着院子的平房。

推开木门，房屋已垂垂老矣，破败不堪。院子里却很热闹。墙上爬满了绿油油的藤叶，地上放着不少花盆，鲜虹蜡黄的美人蕉张扬地艳丽着，粉粉的月季则有些羞答答地半低着头，还有些不知名的小花和蓬勃的杂草做点缀。

看得出这些花儿已久无人打理，却透出恰到好处的野性美。但他心里是失望的，他指着院子中间，说：“那年我经常坐在那儿看书。”

那年，少年上高一，正是桀骜不驯的年纪。爸爸时不时向他大吼大叫，妈妈则天天唠叨，哀叹儿子不争气。

少年觉得，只有舅舅舅妈喜欢他的。舅舅家离学校不远，一次放学恰逢下雨，少年便跑到舅舅家躲雨，和舅舅坐在屋檐下看雨点滴在石板上，随意地聊天。少年很喜欢这种感觉，便经常在放学后拐到舅舅家待上一会儿。

院子不大，不过三四户人家。青砖院墙石板地，靠着院墙四周，放了一堆花盆，没有花，竟全是清一色的含羞草。最吸引少年的还是舅舅家一橱的书。傍晚斜阳中的这个寻常院落，经常可以看到少年坐在竹椅上津津有味地看布。一个女孩的出现，扰乱了少年的心绪。

女孩跟少年差不多年纪，每天当少年把书翻到第三四页的时候，就能看到她背着书包走进院子。有时，她会拿着水壶给那些含羞草浇水。

原来这都是她种的，少年好奇地抬头看她，她的眼睛也恰好瞥过来，目光刚一碰撞，她便急急垂下眼帘，如同被触碰含羞草叶片。

她的眼睛特别透亮，如一泓清泉。少年的心里有个最柔软的地方被触动了，一种麻酥酥的感觉然就弥漫了全身。

这是一种在少年十几年的人生中从未体验过的感觉，他的身后似乎有一股温泉正在汨汨向外冒着热气，点亮了内心有些沉寂的激情。

每日的四目交错，让少年的心里充满期待。女孩进门前，书页便悄然停留在原处。直到看她进了门，转身进了东面的屋子，少年才低下头，继续看书。

少年知道女孩的心里一定也有着和他一样的期待。如果某天少年有事没去舅舅家，第二天他就会双从女孩的眸子里看到满眼的思念和重逢的惊喜。

他们通过眼睛传递着快乐的默契，少年甚至不知道她的名字，也从未试图跟她一句话。在这种默默而温暖的交流中，少年浮躁的心开始渐渐平静，一种美好的情愫使他莫名地觉得自己肩上担负着责任，让他对未来充满了憧

憬。

几个月以后，少年不再像个小公鸡似的和爸爸针锋相对，也有耐心妈妈唠叨一阵子了。最吃惊的是他的老师和同学，少年的成绩从班里的倒数第十一名一下子蹿到了前十名。

暑假的时候，作为奖励，父母带着少年去了一趟北京。在香山顶上，少年买了一套红叶做的书签，他想等回去的时候送给女孩，她一定会喜欢的。

回来以后，少年却再也没有见过女孩。东边的那扇房门，一直紧紧关着。少年几次想问问舅舅，终究欲言又止。

那套红叶的书签，少年一直不舍得用，放在抽屉的最里边。

女友有一双清澈的大眼睛，她甜甜地笑着，向往地说：“多美的院子啊，在这里看书，感觉一定很好！”而她的眼光迷离着，似乎并未见女友的话却又似乎听见了，因为他清楚地回答了一句：“是啊，真美，这是一个种满含羞草的院子。”

